

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：教育学科

資格：講師

氏名：西山 裕子

| | |
|--------------------------------|-----------------------------------|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| 英語圏の文学（イギリス文学）、英国十九世紀女流作家の作品研究 | イギリス文学、英語文学教育 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 博士（文学）、修士（文学）、学士（外国文化） | 関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程英文学専攻（文学）修了 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|--------------|-----|----|
| 事項 | 年月日 | 概要 |

| | | |
|---------------------------------------|-------------------------|---|
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1. クラスルームイングリッシュの実践と応用 | 2020年04月～現在 | 教育学部で担当しているゼミナールにおいて英文学の基礎的な知識を応用しながら、小学校英語への活用方法を研究し、学生を主体としたゼミ活動に取り組んでいる。特に、専門分野である英語英文学において小学校教員に必要なテキストと教材を援用し、教育現場で活用できる「クラスルームイングリッシュ」を採り入れて、初等教育において必要な英語力の定着と背景知識への理解を促進するための活動を継続している。 |
| 2. 英語科で応用するための、発音演習 | 2019年09月～現在 | 教育学部一年生を対象とした英語科目において、教職で必要とされる基本的な発音の構造を説明しながら、CALL教室のシステムを活用して発音演習を行っている。本演習は、幼保、小学校、中学校、特別支援などの教職課程の資格を希望する学生に対して担当授業内で実施し、現場で活用できる英語力の定着を目指している。 |
| 3. エッセイ・ライティングの指導と実践 | 2019年09月～現在 | 教育学部では、現場で使える教室英語の修得を目指す以上、他の学科のようにライティング活動への指導時間が多いとはいえない現状にあって、新たに設置された中学校英語コースへの対応策のひとつとして、「書くこと」によるコミュニケーション能力向上のための演習を「エッセイ・ライティング」の形で採り入れている。 |
| 4. 外国語コミュニケーション活動の実践 | 2019年04月～現在 | 教育学部の二年生を対象とした科目において、ネイティブの教員が行う活動と同様に、実践的なコミュニケーション力を目指したスピーキングとリスニング演習を行っている。特に、授業内容については、Nativeの教員と常に連携をとりながら、クラスのレベルに応じた内容把握演習を繰り返し行うことで、教職で活用できる英語力の基礎を固める工夫を凝らしている。 |
| 5. 文学作品の読解演習と翻訳 | 2017年04月（現在に至る）2020年05月 | 学生の理解度を深めるために、英米の文学史と著者に関する略歴および、歴史的文化的背景の概略を、英語で書かれた資料で提示し、読解演習の一環として随時解説を加えながら内容把握演習を実施した。特に、事前に資料を配布することで、学生の自発的な読解を促し、その上で授業時に予習箇所について解説を加えて、学生の学びが深まるように配慮した。2020年度の遠隔授業においては科目目的の修得を目指して、作品の背景・文学史における位置付け・登場人物の描写に関する考察・プロットの分析など、初めて文学作品を読了する学生にむけて議論の場を提供し、自己学修の在り方を再検討した。 |
| 6. 英語音声学の理論と実践 | 2017年04月から2020年03月 | 留学を予定している学生を対象に、明瞭な発音ができるように、IPAを応用した実践的な訓練をCALL教室のシステムを活用して繰り返し行った。また、音声学の知識を応用して、リスニング力の向上や資格試験の習得に向けた訓練を重ねることで、学生の「音」に対する意欲を高めるように授業内容に工夫を凝らした。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1. 発音の秘訣 | 2019年04月～現在 | 教育学部における、一年次と二年次の担当クラス（科目）において、学生の学びの目的（幼保・小学校など）に応じた、発音演習プリントを作成し、発音指導の一環としている。 |
| 2. 英米文学史の概説 | 2017年04月～現在 | 英米文学史、時代背景、著者の文学的背景などについての資料を作成し、教材の一部として活用している。なお、資料はすべて読解演習の一部になるよう、英語で提示している。 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. ボランティア翻訳と派遣スタッフ、特に、国際見本市での通訳・大使館業務 | 1996年10月1999年12月 | 通訳学校での研修を経て、プレス向けパンフレットなどのボランティア翻訳スタッフおよび、国際見本市・総領事館への派遣スタッフとして翻訳と通訳の実地経験を重ねた。大学院で学んだ英語英文学を社会で活用するために、英語による実務経験の幅を広げながら、海外スタッフとの連携を図って活動を行った。 |
| 4 その他 | | |
| 1. 日本ブロンテ協会関西支部事務局次長（2020.9～） | 2020年09月就任予定 | 事務局長の補佐役として、日本ブロンテ協会関西支部の |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|------------------------------|------------------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 4 その他 | | |
| 2. 附属高等学校IE系の学生を対象とした模擬授業の実施 | 2019年11月11日2019年11月25日 | 運営全般に携わる。特に、学会運営、事務と総務に関する業務、学会員への諸連絡、すべてに目配りし、学会運営が円滑に進むように事務局長と連携をとりながら業務内容を進めていく。 武庫川女子大学附属高等学校3年生IEコース（教育専攻希望者）の生徒を対象とした英語の授業を2回に分けて実施した。第1回では、高校英語と大学英語の学びの違いを実際の高校英語の教科書を引用しながら体現（再現）し、第2回目では、英語を理解して修得する方法を絵本・映像を用いて提示した。特に、第1回目でグループ分けをして、グループごとに課題を与え、第2回目ではグループワークの結果を発表してもらうこと、事後のフォローアップとして全員の課題を添削して各自にコメント付きで返却するなど、附属高等学校の教員と連携しながら大学におけるアクティブ・ラーニングの様相を提示した。 |
| 3. 教育学科2年生英語科目のコーディネート業務 | 2019年04月～現在 | 科目の運営・授業内容に関する統括・ネイティブの教員との連携を重視しながら、「外国語コミュニケーションI、II」科目において学生が円滑にかつ、安心して授業に取り組むことができるように、コーディネート業務を行っている。業務内容には、学科の日本人教員と外国人非常勤講師の先生方の中で、特に事務的・教務的な側面において相互理解を促す役割も含んでいる。 |
| 4. 授業アンケート結果に基づく授業方法の改善・実施 | 2017年04月～現在 | 武庫川女子大学において一斉に実施されるアンケートの他に、①授業の進捗について②授業内容（実施方法）改善に関する学生の意見調査を必要に応じて複数回実施することで、より、フィードバックの重要性を踏まえて、学生により充実した学習環境を与えられるように担当科目（大英・短英・大教・現在は、新教）で努めている。 |
| 5. 平成20年度日本ブロンテ協会奨励賞佳作受賞 | 2008年 | 所属学会の学会誌への投稿、審査を経て受賞した。本論文をブロンテ研究の基盤として、以後研究活動を続けた。 |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|------------------------------|-----------------|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1. 中学校教諭専修免許状（英語） | 1996年03月 | （免許状番号：平8中専第10199号） |
| 2. 高等学校教諭専修免許状（英語） | 1996年03月 | （免許状番号：平8高専第10207号） |
| 3. 中学校教諭一種免許状（英語） | 1994年03月 | （免許状番号：平5中一種第1717号） |
| 4. 高等学校教諭一種免許状（英語） | 1994年03月 | （免許状番号：平5高一種第1708号） |
| 2 特許等 | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 英会話学校（東京都）における児童英会話講師 | 1994年（2年間）1996年 | 幼稚園児を対象に、文字指導の導入、フラッシュカード・歌遊びを用いながらのロールプレイなど会話を中心とした演習を英語で行った。 |
| 4 その他 | | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---------------------------------------|---------|-----------|------------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 1. 「私たちの言説一面影の町『ヴィレット』における結末（エンディング）」 | 単 | 2016年03月 | 大阪教育図書『文藝礼讃——アイデアとロゴス』 | イギリスにおける英語文学が日本のみならず世界の多くの国々の女性たちの言説と関係し、いかにして共通のテーマを有するののかという問いを内包した作品がシャーロット・ブロンテの遺作『ヴィレット』であろう。とりわけ、語り視点のブロンテ文学の中核をなしていると考えられてきたが、彼女の語り口は冒頭から破綻している。ゆえに、曖昧だと評されてきた結末部分は、四技能における「読み」を追求していくと時代の渦の中で抑圧されなければならなかった「生」への挑戦と抗議を示していることがわかる。（pp：203～214） |
| 2. 『ブロンテ姉妹の世界』 | 共 | 2010年09月 | ミネルヴァ書房 | 本著作が他の研究書と違う点は、国内外の一般愛好者から研究者まで幅広い層に向けてブロンテ文学の真価を問いかけ、作品を「読む」上でブロンテ作品の再読について読者に再考の機会を与えている点である。『ヴィレット』の本質は単にあらすじだけで解明することは不可能ではあるが、女主人公ルーシー・スノウの苦悶に満ちた内面描写に切り込むように全体を筋立てて追っているところに本著作の特徴がある。心情を描きながらも長編を端的にまとめることを主眼とし、日本のみならず幅広く世界の批評史に新たな視点を投げかけるよう努めた。（pp：199 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|-----------|----------------------------|---|
| 1 著書 | | | | |
| 3. 『あらすじで読むジョージ・エリオットの小説』 | 共 | 2010年02月 | 大阪教育図書 | ～206) 著者：西山裕子、内田能嗣他 ジョージ・エリオットの作品では村人たちの談話分析が重要な意味を持つ。つまり、対人コミュニケーションの成立を「読み込む」ことなくして、作品の解釈は不可能であるといっても過言ではない。この『牧師館物語』で小説家エリオットの出発点となる、数々の問題提起を含む場面をくまなくあらすじに組み込むことによって、のちの作品に影響を与えたプロットがより明確になり、その結果としてエリオットの全作品の研究手法や受容についての新たな出発点が見いだされると考えられるであろう。(pp:3～11) 著者：西山裕子、内田能嗣、原公章他 |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. A Voice of One's Own: A Study of Charlotte Brontë's Autobiographical Fiction | 単 | 2012年03月 | 関西学院大学 (博士学位論文) | シャーロット・ブロンテの小説は自伝的要素が色濃いと評されてきた。なぜブロンテは一人称の語り的手法を用いたのだろうか。この疑問を解明するために初期作品から遺作まで、各作品の特徴と主人公の造形にみられる変遷を精緻に辿り、同時に時代に沿った「読み方」を追求することでブロンテが自分の考えを代弁する最も適した語り手を創造しなければならなかった「理由」をまとめた。その際、オーディオ・ブックなどの媒体にも着目して、「音」をヒントにして主人公の内奥を引き出すことが出来るように精読しながら四技能の「読み」を深めていき、ブロンテ作品を「ヴィクトリア朝におけるキャンオン」に位置づけた。全6章。(論文は英語表記) |
| 2. The Moral Conflict in George Eliot's Early Novels: Between Self and Community | 単 | 1996年03月 | 津田塾大学 (修士学位論文) | 英国十九世紀の女流作家、ジョージ・エリオットの作品研究においては、後期の長篇の分析が多い。しかしながら、彼女の作風が1857年の処女作の執筆を終了した頃にはキリスト教信仰から「人間」信仰への回帰を反映していることを踏まえるとき、初期作品群にのなかに他者への共感の重要性が描かれていると考えられる。このようなジョージ・エリオット作品の解釈は、論文執筆当時のいわば、研究基盤とされていた。しかしながら、この研究基盤にあえて考察を加えることにより、共同体社会における人間の心情の内奥、共感を求めて葛藤する個人の生き方に関して、ヴィクトリア朝社会の時代的背景を踏まえて議論した。序章、本論3章、結論の全5章。(論文は英語表記) |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. 多読と精読——外国語コミュニケーションのための実践的アプローチ—— | 単 | 2020年03月 | 『教育学研究論集』第15号 (武庫川女子大学大学院) | 英語教育において2020年度から新たな取り組みが始まることで、これまで英語力を測定する際に大きな比重を占めていた「読む」「聞く」という2技能に加えて、「話す」「書く」技能がより重視されていく今後の4技能統合型の英語学修において、いっそう領域統合型の授業運営が求められるようになる。4技能のうち特に「読む」と「話す」技能について、これからの英語教育で外国語コミュニケーションにむけた英語表現力を向上させるために、どのように対応することが望ましいのであろうか。本稿では、新中学校学習指導要領を念頭に置くと、多読と精読、この二つの技法は、アウトプット型の言語活動を補完し合いながら、小学校の外国語活動と、外国語科を経て、中学校の外国語科(英語)を接続し、コミュニケーション・スキルの基盤を確立する可能性を多分に含意していることを論じた。 |
| 2. シャーロット・ブロンテ『ヴェレット』における反復「霧」の描写—(査読付) | 単 | 2011年03月 | 『英米文学』第55巻(関西学院大学英米文学会) | 物事は繰り返される時、「何らかの意味を持つ」とブースが指摘するように、本論では「霧」の繰り返しに意味があることを解明するために、特定の場面に絞って分析を進めた。また、コミュニケーションをとるうえで重要な役割を担う「時制」、「形容詞」や「副詞」といった品詞の使い方にも注目し、女主人公の自己表現方法に関する特殊な語彙の使い方を例に挙げて分析した。その結果、ルーシー・スノウが意識的にエンディングを隠蔽することは独自の語りの特徴を示すものであることを指摘し、物語の結末に顕著な「曖昧性」の意図に意味付けを行った。(pp:69～91) |
| 3. シャーロット・ブロンテ『教授』における「虚飾」の意味(査読付) | 単 | 2009年12月 | 『関西英文学研究』第3号 (日本英文学会関西支部) | 本作には、後の小説において文学史上主要な女性主人公が出現することを予示する重要な要素が隠されている。それが示されているのが、主人公ウィリアム・クリムズワースが経験したベルギーの「虚飾(gilt)」という表現である。つまり、「読み」という行為を深めていけば、多角的な読解方法によって言葉が多様な意味を導き出すために必要不可欠な媒体と |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|------------------------------------|-------------|---------------|--|---|
| 3 学術論文 | | | | |
| 4. 『アグネス・グレイ』における隠された姉妹像（査読付） | 単 | 2008年10月 | 『ブロンテ・スタディーズ』第4巻・第6号（日本ブロンテ協会） 2008年度日本ブロンテ協会奨励賞佳作受賞論文 | なっていることが分かる。男性主人公に代わって、後半部分では「フランシス・アンリ」という女性が語りの中心を担うようになるからだ。本論ではこの二人を「主人公」と捉え、時に聖書の文句を援用しながら、語り手の「性」が移行する過程とその必要性に迫った。（pp：77～96） 欧米のみならず日本における「姉妹」関係にも通じる「（女教師）アグネスの沈黙」というコンテクストで本作を分析することによって、語り手の効果的な役割を検証した。アン・ブロンテが描いたアグネスは、自己表現を抑制したヒロイン像の原型となっており、彼女の語り口は、沈黙によってより効果的な言語表現へと転化している。四技能にとって欠かさない、緻密な「読み」と解釈によって、「沈黙」は、ヴィクトリア朝の時代を背景にガヴァネスとなったアグネスが自分を取り巻く環境に抗い、向き合おうとする態度を端的に示していることがわかる。（pp：33～46） |
| 5. 『ジェイン・エア』—— ジェイン・ロチェスターの「自伝」を読む | 単 | 2008年03月 | 『英米文学』第52巻（関西学院大学英米文学会） | 副題に明記されている『ジェイン・エア——「自叙伝」』見られるように、本作は言わずもがな、語り手で主人公「ジェイン」の自伝である。しかし、ここでいう「ジェイン」とは語り手の現在にいるわたし、つまり、ロチェスターと結婚して幸福な家庭を築き上げた「ジェイン」なのか。それとも、物語の時間にいるわたし、孤児「ジェイン・エア」なのか。本研究ではジェイン・ロチェスターとしての「過去と現在」の差異と主人公「ジェイン」の意図的な時間操作によって生じた歪曲に焦点を当てながら、本書を「ジェイン・ロチェスター」の自伝として再読することによって、語り手ジェインの性質を分析しなおした。（pp. 53～71） |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. 戦争と恋愛のはざま——アレグザンダー・パーシー考 | | 2012年10月 | 2012年度日本ブロンテ協会全国大会（於、大東文化大学） 全国大会、シンポジウム発表： 題目：「ブランウェル・ブロンテの詩を読む II」 | 本発表ではブランウェル・ブロンテのアングリヤ戦争詩に焦点を当て、その特徴を概観した。とりわけ、これまで言及されてこなかったブランウェルのロマンチストとしての様相が、バイロンの詩を模す形で表れていることに着目してチタムの論考に再評価を与えた。概要は以下の通り。 戦争と政治抗争——これまでブランウェル研究は、この二点に絞られて読み解かれてきた。しかし、恋愛を主題とした初期のアングリヤ詩は、主人公アレグザンダー・パーシーに別の価値観があることを示唆しているのではないだろうか。本発表では、ブランウェルによって1837年に（PBBの署名で）書かれた断片的な数編の詩——‘The Rover’， ‘The Angri-an Hymn’， ‘Augusta’ ——を一連の物語詩として統合し、アングリヤ物語の解釈に必要な不可欠な登場人物とキーワードにも触れながら、「海賊」パーシーが戦いを好みながらも、その一方で恋愛にも傾倒する所以を考察した。 |
| 2. Villetteにおける「霧」の描写 | | 2009年10月 | 2009年度日本ブロンテ協会全国大会（於、横浜市立大学） | 語り手で女主人公のルーシー・スノウは、冒頭からエンディングに至るまで自分の本心を隠そうとし、その解釈を「読者の想像力に委ねて」いる。なぜ彼女は自らの心情を隠さなくてはならなかったのだろうか。その意図を探るために、ルーシーにとって人生の岐路に、必ず現れる、一つの自然現象に着目した。「霧」である。「霧」の描写を通じてルーシーの言葉の隠蔽と自己抑制が次第に紐解かれていく様を追うことによって、最終的には、ルーシーの真意を彼女自身の主体性の問題と関連づけながら「曖昧なエンディング」の意味に迫った。 |
| 3. The Professorにおける「虚飾」の意味 | | 2008年12月 | 日本英文学会関西支部第3回大会（於、関西学院大学） | 『教授』は、シャーロット・ブロンテの処女作でありながら何度も出版を拒否された挙句に彼女の死後やっと出版に漕ぎ着けた「問題作」である。にもかかわらず『教授』は、『ジェイン・エア』に繋がる要素を多分に含んでおり、後の『ヴィレット』のテーマを先取りしていることから、作家ブロンテにとって転機となる、重要な作品だといえる。このように『教授』から『ジェイン・エア』の橋渡しとなっている、テーマの移行を示唆する「萌芽」とは何なのか。「虚飾」という、一見したところ他愛のない描写を通じて、主人公クリムズワースの潜在意識に新たな側面が浮かび上がる過程を、序文の言葉が含意する意味を解釈しながら、他の登場人物との関わりで分析した。 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|-------------------------------------|-------------|---------------|--|--|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 4. Jane Rochesterが「語る」もの | | 2007年07月 | 2007年度日本ブロンテ協会関西支部夏季大会（於、関西大学） | 回想形式で語られる「わたし」の過去は、語っている現在という時間にいる、「ジェイン・ロチェスター」としての「わたし」ジェインという視点ではどのように「語りなおされて」いるのだろうか。一人称の「わたし」のジェインはその重層的な語りによって何を伝えようとしているのだろうか。この問題について、現在から過去に遡るときに見られる物語の歪曲に争点を当てることによって、歪曲しながらも着実に語りの現在の私の見方を読者に提示していく語り手「ジェイン・ロチェスター」の戦略的な手法を分析した。 |
| 3. 総説 | | | | |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 1. 教壇にたって——英語教育のなかの英語文学 | 単 | 2020年03月 | 「英米文学会会報」第124号 （関西学院大学 英文学研究室） | 本エッセイでは、英語教育のなかで英語文学をいかに導入して、実践的に学生に指導する必要があるのかを教育学部における英語修得の現状を踏まえて論じた。特に、これからの英語学習活動にとって、「音」が重要な機能を果たしうること。その際に、音声学上の「区切り」を認識しながら読み書きを行う必要があること。（言い換えれば、教育現場ではこの方法を学生が教えていく必要があるということ）また、このように考えてみると実は、「区切り」という概念は英語文学においても非常に重要な役割をしているという観点によって、2020年度に施行される新学習指導要領の「英語の教科化」への対策を講じることが出来るかと指摘した。 |
| 2. ディアドリ・ル・フェイ著、『ジェイン・オースティン 家族の記録』 | 共 | 2019年07月 | 彩流社 （内田能嗣・惣谷美智子編） | 原著はDeidre Le Feye, Jane Austen: A Family Record. ジェイン・オースティンの伝記についてはこれまでに数多く出版されているが、本書はその中にあっても、とりわけ、現存する伝記の中で比類のないほどにオースティン像を細部にわたって緻密に映し出していると考えられている。全586頁。日本オースティン協会、及び日本ブロンテ協会所属の会員による分担訳。 |
| 3. マリアン・トールマレン著、『歴史のなかのブロンテ』 | 共 | 2017年02月 | 大阪教育図書 翻訳（共訳） | 原著はスウェーデンで著名なブロンテ作品研究者 Marianne Thomahlen編によるThe Brontës in Context。日本ブロンテ協会30周年事業の一環として本著に収められた42章をそれぞれ、協会のメンバーが中心となり翻訳。担当箇所は第25章、Patsy Stonemanによる映像論。原題は‘Adaptations, prequels, sequels, translations’で、この章では『ジェイン・エア』と『嵐が丘』に関する翻案作品の変遷とその特徴が時代の流れに沿った受容のありかたを踏まえて明記されている。全556頁、分担訳。（pp. 255～265） |
| 4. コミュニケーション考：まさかの「修行」—後日譚 | 単 | 2015年03月 | 『英米文学』第59巻・第2号 （関西学院大学英米文学会） | 本エッセイにおいて、「コミュニケーション」がいかに文化的・歴史的背景によって、学びと言ういわば「修行」の場に影響を与えるのかについて談話分析の手法を婉曲的に用いながら述べていった。つまり、会話の成り立ちの過程や会話そのものの在り方によってコミュニケーションという言語ツールがいかに時代背景を映し出しているのかを数々の対話を引き合いに出しながら、特に十九世紀のイギリス文学と現代の日本との違いを考慮したうえで、「会話」のバリエーションは結果として文化的な要因に左右されながら多様な解釈を引き出していることを論じた。（pp:121～122） |
| 5. サラ・フェルミ著、『エミリの日記』 | 共 | 2013年04月 | 大阪教育図書 翻訳（共訳） | 原作は2006年に出版されたSarah Fermiの手になるEmily's Journal。これまで数多くの「伝記」が書かれてきたが、本作は、あくまでも、Fermiによる創作日誌の形を採る。エミリー・ブロンテが垣間見たシャーロット、アンとの日常、姉と妹のあいだにあって一人ハワースに残されたエミリーが感じ取り苦悶した内容など、確かにFermiが「書き直した」自伝の体裁を採ってはいるものの、その内容はジェランやギヤスケル、ウィニフリスが描き出したエミリー像にかなり近似している。創作故に一般の読者にも読みやすい文体となっているために、エミリー・ブロンテの生涯を概略的に理解するための入門書に準えられるといっても過言ではない。全253頁、分担訳。（pp. 98～108） |
| 6. ブロンテ作品における語りの再考：シャーロット・ブロンテと霧 | 単 | 2012年01月 | 「Purple Heather:日本ブロンテ協会関西支部ニューズレター」第1 | ブロンテ姉妹の作品において、自然描写が語りの一部として機能していることを、ヒリス・ミラーの批評理論を引き合いに出しながら、特に、シャーロッ |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|--|--|
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 7. キャロル・シールズ著、『ジェイン・オースティンの生涯——小説家の視座から』 | 共 | 2009年05月 | 1号 (日本ブロンテ協会関西支部) 世界思想社 翻訳(共訳) | トの遺作となった『ヴィレット』第9章を中心に再検討した。 原著は2001年に出版されたCarol ShieldsのJane Austen: A Lifeである。担当箇所(第九章)では、小説家としてオースティンの出発点となる『ノーサンガー・アビー』が誕生するまでの秘話が伝記的な側面を多分に踏まえたうえで綴られている。シールズは、小説家としての視座から、オースティン研究を専門にしてはいないものの、伝記の断片として作家の生涯を「きめ細かい散文で再構築」(New York Timesのreview)し、描き出している。全23章、219頁。(p. 99~108) |
| 8. アン・ブロンテの詩の解釈における、ブロンテ姉妹像の一考察 | 単 | 2008年7月 | 「Brontë Newsletter of Japan」第74号 (日本ブロンテ協会) | 本エッセイでは、アン・ブロンテの手になる「釣鐘草」の詩を、ブロンテ姉妹の歴史的記述を基に考察した。アンの小説『アグネス・グレイ』において「釣鐘草」は単に一つの植物にはあらず、主人公のアグネスにとっては、自己認識を示す指標でもあった。作品に記されたキーワードを読み解くことに、ブロンテ文学を鑑賞する醍醐味があると論じた。 |
| 9. 語り手Jane Rochester再考——Jane Rochesterが「語る」もの | 単 | 2008年02月 | 「Purple Heather: 日本ブロンテ協会関西支部ニューズレター」第7号 (日本ブロンテ協会関西支部) | 『ジェイン・エア』についての研究の成果を学会で発表したのち、ナラトロジーの視点から再度発表内容を振り返り、自伝的小説における客観的な「視点」についての概要にまとめた。 |
| 10. 学会活動(全国大会)の報告レポートの作成 | 単 | 2008年01月 | 「Brontë Newsletter of Japan」第72号 (日本ブロンテ協会) | 全国大会の学会発表4篇、講演会とシンポジウムの概要を報告した。記載にあたっては、文学研究における発言者の意図を明示する工夫を加えて、今後の課題と研究に繋がる研究報告レポートを作成することに努めた。 |
| 11. アン・ブロンテの名言集についての一解釈 | 単 | 2007年01月 | 「Brontë Newsletter of Japan」第69号 (日本ブロンテ協会) | アン・ブロンテがロビンソン家で「ガヴァネス」をしていたときに一輪の花に思いを寄せた。1840年8月22日にアンが謳った詩の解釈を通じて、ブロンテ姉妹の詩の一側面を考察した。 |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| | | | | |

学会及び社会における活動等

| 年月日 | 事項 |
|-----------------------|------------------------------------|
| 1. 2008年04月～現在 | 日本英文学会・日本英文学会関西支部会員 |
| 2. 2007年01月～現在 | 日本ブロンテ協会関西支部、運営委員ほか、事務局次長(2020.9～) |
| 3. 2006年10月から2020年03月 | 日本ジョージ・エリオット協会会員 |
| 4. 2006年04月～現在 | 関西学院大学英米文学会会員 |
| 5. 1994年04月～現在 | 津田塾大学大学院英文学会会員 |